

ジンケンテイシウサミスミレコ

諸注意

- ✓ 本書は東方 project の成人向け二次創作です。
(※東方エロ同人だぞ、18歳未満は読むなよ)
- ✓ 本書には性行為、暴力、重大な人権侵害を含む描写が含まれます。模倣した場合、刑事または民事上の責任を招くおそれがあります。(※真似するなよ)
- ✓ 本書に登場する組織、団体、個人、法律その他は実在のものとは関係ありません。本書に登場する「人権」概念はスケベシチュを描くためのギミックにすぎず、何ら現実の政治ないし社会に対する関連を持ちません。(※ただの作者の妄想だぞ)

以上、ご了承の上ご覧ください。

Week 1

じゃらじゃらと鳴る不快な金属音に、宇佐見董子は目を覚ました。硬い床の上で眠ったせいで体の節々がこわばっている。窓から差す初夏の柔らかな陽光が、薄い毛布越しに冷え切った肌を温め、董子を再び眠りへと誘いかける。このままうずくまって、ふたたび眠りこけることが、この上なく甘美なものに思われた。しかし。

「……」

ぼやけた視界の中に、鈍く光る鉄の鎖が映る。身じろぎするたびに鳴る耳障りな音の出所。それがただの夢で、気が付いたら自分は家のベッドの中にいる。そんなささやかな願いが、目を覚ますたびに裏切られて何度目の朝だっただろうか。床から伝わるがさつな足音に、董子のぼやけた思考が中断させられる。あの男が目を覚ましたのだ。

寝室を出る。トイレのドアを開ける。排尿。開け放したままのトイレから響いてくるじよぼじよぼという音は

不愉快だったが、少なくとも今朝は向こうのトイレを使ってくれる気になったらしい。安堵している自分に気づいて、董子は身を粟立たせる。

足音が近づいてくる。男はリビングダイニングに入ってくると、董子のほうを一瞥する。なるべく視線を合わせないように、董子は男の様子をうかがう。タンクトップシャツにトランクス姿の男は眠そうに目を細めながら、キッチンカウンターから朝食シリアルの大袋を手を取った。押し黙ったまま、男はステンレスの皿にシリアルを盛り、その上から水を注ぐ。無意識のうちに董子の視線が男の手元を泳ぎ、空っぽの胃が空腹に鈍く痛む。こんな状況にあっても健康な自分の消化器が恨めしい。

男が水でふやかしたシリアルを皿を董子の前に置く。

「待て」

皿の中で水に浮いているシリアルをじっと見つめている董子に、男は冷たく言い放つ。董子が膝の間に手をそろえて座りなると、男はトランクスの前あきを無造作に開け、その眼前に男根をさらけ出した。

浅く息を吐きながら、董子は口を開く。差し出された舌に、男は無言のまま赤黒い性器を載せる。先端ににじんだ小水をなめとるように舌を這わせると、酸化した皮脂の生臭いオスの臭いが鼻をつく。

「……よし、いいぞ」

董子の口腔でむくむく膨れ上がった一物が、唾液の糸を引いて引き抜かれる。男が身を離れたのを確かめて、董子は床に置かれたエサ皿に顔を寄せる。いただきます。口に出すことを許されない言葉を中心に唱えながら、皿に顔をうずめるようにしてふやけたシリアルをすすする。青臭い雄臭でいがらっぽい口の中に広がる、とぼけた薄甘い味。それでも栄養はあるし、胃の中を膨らませることはできる。食べなければ、本当に死んでしまう。這いつくばったまま必死に、しかしゆっくとエサ皿をすすり立てる董子の背後に、男がとりつく。

「あがつ……！」

男は申し訳程度に尻の谷間に唾を垂らすと、屹立した剛直を秘めやかな繊毛に縁どられた尻穴に押し当てた。そのまま尻たぶを掴むと、何の銜もなく怒張したペニスを董子の腸内に押し入らせる。灼けた杭で背中を割かれるような衝撃に備えきれず、顔をエサ皿の中に押しつけられながら、董子は半ば溺れるように喘いだ。

「かはつ……がつ……ぐつ……えほつ」

むせ込んだ拍子に、ふやけたシリアルの粒が鼻腔へと逆流する。必死に呼吸を整えながら、それでも懸命に男に寝けられた通り、下腹部に力を込めて尻の穴を締め上げる。早く男を満足させれば、それだけ早く楽になれる。

尻穴から頭蓋の底まで押し上げられるような圧迫感にちりちりと脳を焼かれながら、酸素の足りない頭を必死に働かせる。

「……ふっ！」

唐突に、直腸にねじ込まれた男のペニスがひときわ熱く膨れ上がる。肛肉をぎりぎり押し広げながら、二度と男の一物が脈動する。何か温かいものが、腸の奥のあたりを駆け上る。いや、降りてくるのか。下腹部のあたりでごろごろと蠢くそれが男の精液なのか、それとも自分の腸の中身なのかも判然としない。男が身を離す。腰から下がマヒしたように感覚がぼんやりとして、まだ入れられているのか抜かれたのか、開いているのか閉じているのかもよくわからない。吐かなかったことに感謝しながら、ふたたび董子はエサ皿の底に残ったものに舌を伸ばす。吐いたものをかたづけさせられるのは面倒だしみじめだ。男のモノを口で清めさせられる前に、入れられるものは胃に入れておきたい。

「トイレの時間だ」

男が、ベット用の紙砂が敷き詰められた洗面器を董子の膝の間に蹴ってよこす。鈍く痛む尻穴からなにかがぼたぼたと音を立てて滴り落ちる。それが自分の排泄物なのか、男の垂れ流した精液なのか、考えないようにしな

がら、董子はエサ皿の底に舌を這わせる。

……どうして、こうなったのか。

「宇佐見董子さん。あなたの人権は停止されました」

「はあ？」

呼び出された面談室で、董子は素っ頓狂な声を上げた。

「えっ、ちょっと、まって。人権？」

董子の向かいには、同じようにびったりと髪を七三に分け、暗い色のスーツに名札をぶら下げた、いかにも役人然とした男女の二人組が座っている。

「人権って、あれでしょ、アレ？」

「はい。ですからあなたの人権は停止されました」

淡々と、不条理な言葉をぶつけてくるその口調に、どうせ授業態度に関して小言でも食らうのだろうと高をくくっていた董子の思考は完全に混乱する。人権。なんだっけ。公民の授業で覚えた。社会権と自由権と……あれ、

ワイマール憲法で保障されたのは……そうじゃない。混乱する思考を何とかつくりながら、疑問を口に出す。

「だって、それ、憲法とかで」

「はい。憲法で、国民の基本的人権は保障されています」

「じゃあ」

「つまり今のあなたは国民ではないのです」

「だからといって、もちろんほかのいかなる国家や団体があなたの権利を擁護することはありません」

「要するに、あなたの人権は停止されているのです」

まるで二人で一人のように、言葉に言葉を継いでしゃべる男と女の顔を、董子は交互に見やる。狂っている。この目の前にいる二人は何か妄想に囚われていて、それで勝手に学校に入ってきて、何か勝手なことを言っているに違いない。

逃げよう。董子はできるだけ目の前の二人を刺激しないようゆっくりと立ち上がり、後ずさるようにながらドアににじり寄る。二人組はそれを制するでもなく、ただ目で追っている。

「あのっ、先生っ……」

「ん？」

ドアを開けると、ちょうど良く通りがかった教員を呼び止める。英語の教科担当だ。しかしなんと説明したのか。口ごもっている間に、その教員は童子の肩越しに二人連れの姿を認めると、冷ややかな視線で童子をみた。

「……こいつの人権が停止されたって本当ですかね」

「ええ」

「たった今」

面談室の奥から帰ってきた返事にうなずくと、教員は手を振り上げた。

「へ……？」

童子の視界が揺れる。叩かれたということを理解する暇もなく、バランスを崩して床にへたり込む童子の前で、ドアが閉まる。

「どうして……」

鈍く痛む頬を押さえながら、なげなしの怒りを振り絞って二人連れをにらみ上げる。傾いてゆがんだレンズの向こうから童子を見返す視線は無感情で、たった今振るわれた理不尽な暴力に何の感銘を受けた様子もない。

「こんなこと、許されるわけがないじゃない！」

「残念ながら、今のあなたには人権がありませんので」

「……どうして……」

「それをあなたにお伝えする必要はありません」

「あなたには人権を停止された理由について説明を受ける権利がないのです」

「あなたの人権は停止されていますので」

頬の痛みと怒りが引くにつれ、どうしようもない徒労感が童子の思考を満たし始める。悪い夢だったらいいのに。口に出してみれば陳腐なセリフだが、今のこの足元に巨大な穴が空いたような不条理を表すには、ほかに思いついた言葉もなかった。

がらりと童子の背後でドアが開く。床に座り込んだまま、肩越しに振り返った童子の視界に、大柄な人影が映る。

「誰……」

ピンストライプのスーツにシャツの胸元を開けた、大柄な男。短く刈り込んだ髪の下、浅黒く日焼けした顔は

無表情で、威圧的ではあるが何を考えているとも読み取れない。普段の童子なら、電車に乗り合わせたら隣の車両に移るとまではいかないが、シートの端に距離を置いて座りたくなるような類の男。

「お待ちしておりました」

二人連れが腰を浮かせて男に会釈すると、男は先ほどまで童子が座っていた二人連れの向かいの椅子に腰を下ろした。童子を一瞥すると、男は二人連れのほうに向きなおり、口を開く。

「……よろしくお願ひします」しわがれた声ではあるが、思いのほか丁寧な口調で、一言一句を区切るように男が言う。

「それでは」

「こちらを」

童子からは見えないところで、二人連れがテーブルに書類を広げる。

「……利用条件の制限事項についてですが」

「妊娠はNGです」

「人権停止状態で受胎した子については未解決の法的問題があるため、制限しています」

「あくまでの人権の停止であって剥奪ではない、というのが制度の主眼でして」

「……承知しました。ここの不可逆的な損傷、というのは」

スーツの男は、董子の方を一顧だにすることなく、小脇に抱えていたクリアファイルの書類を二人連れの小役人と検め始めた。

「四肢の切断や臓器の摘出は禁止されます」

「その他の行為についてはケースバイケースですが、おおむね刑法上の傷害罪にあたる行為は控えていただければ」

「死亡した場合に関してですが」

「生命活動が停止した場合、ですね」

「失礼。利用期間中に生命活動が停止した場合について、利用者の責めに帰すべき重大な事由、とありますが」

「意図的で悪質なものでなければ通常は免責されます」

「まあ、懲戒が行き過ぎて生命活動が停止してしまった、のようなケースですね。だいたいの場合は事前にご納付いただいた保証金の範囲で免責ということ」

「……わかりました」

何を、言っているのだ。家や車でも借りるかのように、事務的な口調で交わされる会話。理解を拒絶しようにも、彼らが語っているのが童子自身についての話であるというおぞましい事実が雨だれのように意識に染み入ってくる。死亡？ 暴行？ 懲戒？ そんなことが、許されていいわけがないはずだ。だって。

「服を脱げ」書類にサインしながら、視線も上げずに男が言う。

「……は？」

男は無言のまま立ち上がると、座っていた椅子の脚を勢いよく蹴り飛ばした。

「ひっ……！！」

「ちよつと！！」

男が蹴り飛ばした椅子が、童子の目前に転がる。腕で自分をかばうように身をすくめる童子と男を交互に見ながら、二人連れの男のほうが初めて語気を強める。

「それはこの学校の備品なので、手荒に扱ってもらっては困ります」

「……申し訳ない」

男は転がった椅子を拾い上げ、芝居がかった身振りではこりを払って元の位置にもどすと、董子の前に屈み込んだ。

「服を脱げ。下だけでいい」

「そんな……どうして……」

「服を、脱げ」

菌の根が合わなくなりそうな恐怖に囚われながら、董子はすがるように書類をしまつて立ち上がろうとする二人連れを見る。しかし男は董子の顔を片手でつかみ、己の方に向けさせる。

「服を脱ぐんだ」

「ひゃ……はひっ……」

両頬を掴み上げられ、ゆがんだ董子の唇から、返事とも喘ぎともつかない息が漏れる。殺される？ まさか。でも、もし。本当に。逆らったら本当に、殺されるかもしれない。殺されるよりは、まし。そう考えた瞬間、董子の心は音もなく折れた。震える手でジャンパースカートのボタンをはずし、肩から床へと下ろす。

「下着も脱げ」

「……は、はいっ」

「返事はいい」一言一句を区切るように、男が言う。「さっさと脱げ」

ブラウスと靴下は残したまま、小さなりボンがついたほかは飾り気のない、地味な白一色のショーツに手をかける。震える手で下着を膝の間から抜き取ると、童子は男を見た。

「立て」

「ひぎっ」

返事をする暇もなく、男は腕を後ろ手にねじりあげるようにして童子をテーブルのほうへと追い立てる。

「足を広げろ」

「ま、待ってっ！　ほんとに、やめっ、ッ！」

腹這いに尻を突き出す格好でテーブルの上に押し倒しながら、男は童子の最後の懇願を意に介することなく、足の間を蹴るようにして膝を開かせる。細すぎもせず太すぎもせず、年相応に程よく肉の乗った脚と脚の間で、人目にさらしたことのない秘めやかな茂みがふるふると頼りなげに震える。

なんでこんなことに？　童子は自問する。電車の中で触られたこともあった。見知らぬ男に、グロテスクな局

部の写真を送り付けられたこともあった。けど、まさかこんなことが、こんなことがあるはずはない。かちやかちやと手際よくズボンを脱ぎ捨てる音が、肩越しに聞こえる。まさか、学校の中で、私がレイプされる、なんて。

「……ひっ」

恐る恐る振り返った視界に、男の赤黒く怒張したペニスを認め、董子は視線を逸らす。ネット越しに写真を送り付けてくる変質者とも、記憶の中の父親のものとも次元が違う、女を犯すための肉の凶器がそこにある。

「ふえ……？」

あんなものをいれられたら、こわれてしまう。董子の思考が恐怖にこわばった瞬間、予期せぬ衝撃が下腹部を襲った。

「力を抜け」

「いぎっ……」

男が節くれた指を、無造作に董子の肛門に差し込む。何をされているのか理解した瞬間、董子は出すための場所を無理やり押し広げられる痛みと圧迫感に悲鳴を上げる。

「力を、抜け」

「……がっ……かはっ……」 肛門を指で犯される苦痛と屈辱に、董子はただただ身を震わせる。男は呆れたようにため息を一つつくと、尻穴に指を突っ込んだまま平手で董子の尻を打った。

「ひあんっ！」

鈍く重い痛みが、柔らかな臀肉を突き抜けて骨盤を揺さぶる。骨の芯まで染み入るような痛みに、董子は犬のような悲鳴を上げる。「あっ……あがっ……」

肌がじんじんと赤く腫れあがっても、なお男は二度三度と董子の尻を打つ。いつしか董子は痛みをこらえるのをやめ、机に突っ伏して男に尻を叩かれるままにあえぐだけになっていた。

「……それでいい」

「はあ……ああっ……」

犬のように舌を出して喘ぐ董子に、背中からのしかかるようにして男が耳元に口を寄せる。

「深くゆっくりと息を吐け。クソをひりだす時を思い出せ」

「はあっ……ひいっ……あはあっ、あがっ……」

男に言われるがまま、董子は深く息を吐く。呼吸に合わせてひくひくと痙攣する粘膜の間で、男の指がゆつく

りと蠢くのが感じられた。

「……ふん」

「ひぎっ！」

抽挿していた指を指の腹まで引き抜くと、ねじるように絡めながらも一本の指が肛輪へとねじ込まれる。

「呼吸」

括約筋を一段広く押し広げられ、圧迫感にあえぐ童子に、男が冷たく言い放つ。童子は諾々と、男に言われた通りに深く息を吐きながら、排便するときのように下腹に軽く力を込める。

「あー……っ……はあーっ……」

もぞもぞと、括約筋の全周を少しずつつ押し広げるように、男が関節を曲げながら指をくじらせる。直腸を圧迫される排泄感をこらえながら、童子は男に教えられたとおりに息を吐く。ふん、とつまらなそうに鼻から息を漏らしながら、男が三本目の指をねじ込む。無残に押し開かれた直腸から、詰まった排水口めいた湿った音が響く。童子は、ただただ男に指示されたままに、下腹部に力を込めながら脳天をしびれさせる痛みをじつところらえる。

「おい」

「……っ！」

唐突に、男が束ねた指を肛腔から引き抜く。節くれだった指に粘膜が引きつられる違和感に身を悶えさせながら、荒く息をつく童子の眼前に、男が立つ。

「舐めて、きれいにしろ」

童子はただぼんやりと、惚けたように眼前に突き付けられた生臭く青臭い、オスの匂いをまとわりつかせた肉塊をみやる。男はいらだつたふうでもなく、無造作に束ねられた童子の髪の片方を掴み、顔を腰に引き寄せる。

「今からお前の尻を犯す。その前と後はお前が舐めてきれいにしろ。いいな」

肛門性交。そういう行為があることは、知識としては知っていた。男と男がそういうことをする本も、読んだことはある。だが、自分自身が尻の穴を犯され、その肛門を犯したペニスを口で舐めさせられるという事態は、童子の理解の範疇を超えていた。

「うえ……おえっ」こみ上げる嫌悪感に、嗚咽とも催吐ともつかないくぐもった声が喉元から漏れる。涙交じりにすすり泣く童子を見下ろしながら、男が初めて口の端をゆがめた。

「いいことを教えてやる」童子のお下げを掴んで己の方に向けさせながら、男が深海魚のような目にわずかに愉

悦の色を浮かべる。

「素直に俺の言うことを聞いていれば、早く元の暮らしに戻れるかもしれんぞ」

ひたひたと、男の手が腫れぼったい頬をもてあそぶように叩く。疑う、などという余裕はすでになかった。ためらいがちに開かれた唇の間に、男がいきり立った肉の塊をねじ込む。すえた小水の匂いにむせ込みそうになるのをこらえながら、童子は本能的に歯だけは立てないように、広げた舌で男の肉茎を迎え入れる。

「そうだ」童子の髪を掴んだまま、鷹揚に男がうなずく。「それでいい」

唾液を舌の裏から絞り出すようにしながら、童子は必死に脈打つ肉棒を舌で洗い清める。童子のつたない口技であたえられる快楽は、男の使いこまれた肉茎を満足させるには程遠い。しかし砂糖とスパイスしか舐めたことのない女子学生の清らかな舌に己の一物を載せ、奉仕させる下卑た快楽に、男の無表情な目に捕食者めいたざらつきがわずかに覗く。

「もういい」

さらりとした唾液の糸を引いて、男の脈打つ一物が唇から離れる。顔が映りそうなほどに怒張した抜き身をぶら下げたまま、男は肩を震わせて息をつく童子の背後に回る。ふるふると小刻みに震える膝の裏。程よく肉の乗

った白く清らかな双臂。その間でしとどに震える繊毛に覆われた、いまだしとどに閉じあわされた秘唇。そして最後に、指でほしくり返され、閉じ切らないままばくばくと息をするようにうごめく暗赤色の菊座。順繰りに、その肢体を値踏みするように視線で舐ると、男は尻の谷間に唾を吐いた。

「ひっ」

蹂躪されつくした粘膜に、生暖かいものが垂れ落ちるのを感じて、董子は身をすくめる。男がその大柄な体で董子を覆い隠すように、背後からのしかかる。何か熱くて固いものが、尻の谷間に押し当てられるのを感じた。

嘘だ。最後の最後で、思考の底に残った残滓が訴えかける。これは夢だ、何かの間違いだ。かたかたと奥歯を震わせながら、董子の理性が最後の抵抗を試みる。

「待っ……」

男が董子の腰を掴み、腰を送る。尻穴に押し当てられた肉の杭があっさりと董子の直腸に押し込まれる。董子は声にならない悲鳴を漏らし、失禁した。

じやらり、と首元にまとわりつく不快な音に、童子は我に返る。首輪につながれた鎖を握る男の視線は相も変わらず深海鮫のように底知れない。苛立ちを表すでもなく、声を荒げるでもなく、ただ童子が指示に従うのを待っている。ラッシュの時間帯を過ぎて、人通りも落ち着いた住宅街の私鉄駅。時折行きかう人は、靴と靴下、帽子だけの半裸に首輪とマントという異様な姿の童子にも、それを鎖でつないで歩く男にも、奇異の視線を向けはしても取り立てて騒ぎはしない。そういうものだとな得して、歩みを止めることなく過ぎ去っていく。

初めて男に犯された時の苦痛と屈辱を反芻しながら、童子自身まるで遠い昔からそうされ続けていたような錯覚に襲われている。箸はもちろん手を使って食事をするこも、家の中で服を着るこも、人間のトイレを使うこも許されず、床の上で寝ては、気ままに性欲の発散に使われる日々。童子の記憶が確かなら、この世界ではペットの犬や猫だつてもう少しましな扱いを受けていたはずだ。そんな生活がほんの三日前に始まつたとは信じられず、もう何か月もそんな暮らしをしているような気がし始める。自分の部屋のベッドが懐かしい。

家族はどうしているだろうか。心配してくれているだろうか。せつかく口うるさい親の待つ家に帰れるなら何を差し出しても惜しくはない気分なのに、今の自分には差し出せるものが何もない。自由も、尊厳も。

我が身を振り返るほどに突き付けられる不条理に、ただほんやりと力なく歩く童子の前で、勢いよく自動改札

の扉が閉まる。改札の向こうで待つ男が窓口の駅員に目くばせすると、扉が開いた。人権がなければ、運賃も必要ない。おかしなものだ。不条理も度を超すと、笑いさえ浮かんでくる。笑うのってどうやるんだっけ？ ホームで電車を待ちながら、童子は力なく口の端をゆがめてみる。思い出せない。

やってきた電車はピークを過ぎたとはいえ、優先席を除いて座席はあらかた埋まっていた。

「あの男だ」

男は車内を見回し、ドア際に立つサラリーマン風の中年男に目を止める。

「……行け」

男は首輪から鎖を外し、半ば突き飛ばすように童子をサラリーマンのほうに押しやる。一縷の望みを込めて振り返った目に映る男の視線は無表情で、少女の言外の哀願を気にも留める様子はない。諦念がじわじわと自我を蝕んでいくのを感じながら、童子は中年男に身を歩み寄る

電車が揺れる。揺れた拍子に、童子の体は勢い余って中年男の腕の中に転がり込むように滑り込む。がら空きの車内で不自然なまでに身を寄せてくる、半裸と呼ぶにはあまりにもいかがわしい格好の少女に、中年男は戸惑いの表情を浮かべる。

「……あ、あの」

粘つく喉から声を絞り出しながら、身を離そうとする中年男を上目に見上げる。汚れた眼鏡の向こうで、ぼやけた顔が困惑の色を見せる。

「……君は……」

「……」

無言のまま、中年男の手を握り、マントのうちへといぎなう。男の汗ばんだ手が柔らかかなふとももの付け根に触れると、

「いい、のかい」

董子がうつむいたまま小さくうなずくと、おずおずと触れていた中年男の手が、少しずつ大胆に指先を肌に絡ませ始める。

「……んっ……」

見知らぬ男に肌を触らせるおどましさに、肩をこわばらせ、吐息を漏らす。それを媚態と思ったのか、男の手が腿と腿との間の暖かな隙間へと押し入らせる。誤解するのも無理はない。がら空きの電車の中で、痴女も同然の

格好で現れた女が、向こうから手を握って誘ってきたのだ。この人を責めるわけにはいかない。しかし。

「……ひっ！」

中年男の指が、秘めやかな繊毛をかき分けながら湿った秘唇に触れた瞬間、董子は嫌悪を抑えきれずにくぐもった悲鳴を上げる。それまで、素知らぬ顔でスマホを眺めていた車内の視線が、一斉に董子と中年男のほうを向く。

「えっ……?」

「あっ……あのっ……」

「すみませんねえ」

いつの間にか音もなく背後に忍び寄っていた男が、愛想の良い笑みを浮かべながら助け舟を出す。董子に、ではなく中年男に向けて。

「鎖を外してやった瞬間、この調子でして。ご迷惑でなければよかったです」

「ああ……いえ……あの……」

中年男に見せつけるように、董子の首輪を揺らす。首輪の内側に押し込まれた指に喉笛を圧迫され、董子は小

さくえづく。男は童子の様子を気に留める様子もなく、親し気に中年男のほうにしゃべりかける

「こう見えてこちらの方はオボコでしてね。いやあ、申し訳ない」

「ああ……そう……そう、だったんですか……」

「ケツのほうは使えますよ」

「……ああ……ケツ……ケツ？」

男が、童子の肩を掴んで半回転させ、背中を中年男のほうに向きなおらせる。

「尻の穴ですよ、尻の穴。アナルファックつてやつです。お嫌いですか」

「いや……あの……そんな……」

中年男が左右にかぶりを振る。しかし、視線だけは釘付けられたように、マントの奥で小刻みに震える童子の尻に向いていた。

「こいつも収まりがつかないようですし、情けと思って突っ込んでやっちゃくれませんか」

「えっと……その……」

煮え切らない態度の中年男をよそに、男が童子の耳元に口を寄せる。

「……言われたこと一つまともにできないのか」

「……っ」

小刻みに震える手で董子はマントをめくり、背後で言を左右にする中年男の視線に尻の谷間を晒す。しみ一つないまろやかな尻たぶの間でひくひくと濡れそぼる少女の尻穴が視界に入った瞬間、中年男は口を半開きにさせたままうなずいた。

「……いいんですか……?」

「ゴムだけつけていただければ」

男に促されるまま、董子は後ろ手に中年男の膨れ上がったズボンの股間をまさぐった。手探りでジッパ―を外すと、赤黒く怒張した中年男の一物が董子の手の中にまろび出る。

「で、では」

書類かばんを床に放り出すと、中年男はいそいそと手渡された保護具を自分自身に覆いかぶせる。董子の手に、ゴムの膜越しにもはつきりと熱を帯びて感じ取れる肉の塊が触れた。

「はあっ……」董子に手で導かれるまま、中年男の怒張したペニスが滑らかな尻たぶを割ってひくつく尻穴の中

心に触れる。「ああっ……はあうっ」

中年男が腰を一突きすると、朝方に精子を注ぎ込まれ、ぬらぬらとぬめりを帯びたままの肛門粘膜は、形ばかりの抵抗を見せたただけであっけなく押し広げられる。普段犯されているものよりも小ぶりだが、立ったままの不自然な姿勢で腸内にペニスを受け入れる苦痛に、董子は唇を噛む。

「おっ……うお……」

中年男が、董子の腰を掴んで乱暴に腰を振る。通勤途上の電車内、衆目の中で少女とアナルセックスするという状況がもたらす倒錯的な興奮と、本来性交のためには作られていない器官で快楽を得ようとするもどかしさに中年男は間の抜けた声を漏らす。

「入口のあたりで、しごくようにするといいですよ」

「おっ……おほっ……これは……」

中年男の腰の動きが、亀頭の一番太い部分で括約筋を押し広げるような、浅く小刻みなものに変わる。肛門の敏感な粘膜をこすり立てられる苦痛に、董子は身をこわばらせる。

「んっ……」

童子の尻に腰を打ち付けていた中年男の動きが、不意に止まる。腰を掴んだままの腕がびくびくと痙攣するよ
うに震え、男が童子の腸内で果てたことが知れた。

「はあっ、はあーっ、はあ……」

ドアにもたれかかるように、中年男が荒く息をつく。ズボンの前あきからは、肛穴の締め付けに赤黒く充血し
た一物が、だらしなく顔を出したままだ。はめたはずのゴムの姿は影も形もない。

「……舌を出せ」

「ひっ」

童子と中年男の肛交を眺めていた男は冷ややかに言い放つと、童子の肛門に残ったゴムを乱暴に引き抜いた。
はらわたから異物が引き抜かれるおぞましさに身震いしながら、それでも童子は従順に男を見上げ、舌を出す。
男はつまらなさそうに、ティッシュにくるんだ使用済みのゴムをその下に乘せた。

「礼を言え」

「あ……あり……」

舌に己自身の腸からにじんだ体液と、中年男の性生活の乏しさを物語るどろりと黄ばんだ精液とを絡ませなが

ら、童子は二人の男を交互に見る。生臭く、青臭く、どうしようもない汚臭が鼻につき、視界に涙がにじんだ。

「ありがとうございます……ごさいましゅ……」

通いなれたはずの学校。通いなれたはずの教室。男は、教室の中まで入っては来ない。ちょうどホームルームを終え、一時間目の授業が始まるところだった。

「よろしくおねがいます」

「お疲れ様です」

しかし、これも童子にとって安息の場所ではない。男から鎖を受け取ると、一時間目の教科担任は教壇脇にしつらえられたフックに童子をつないだ。教師も、クラスメイト……かつては童子がそう呼んでいた生徒たちも、半裸の元同級生が首輪と鎖でつながれたまま、教室の前に座っているという状況に疑問一つもっていないように、席につく。

人権を停止された最初の日。服を奪われ、初めて会ったばかりの男に犯され、引っ立てられるように教室に戻された童子は、助けを求めた。誰も助けてくれないとわかると、なげなしの勇気を振り絞って、怒りをあらわにし

た。こんなことはおかしい。こんなことは、狂っている。

だれも何も答えなかった。その代わりに、クラス担任は鎖を掴んで董子を床に這いつくばらせ、その目の床を長い定規で叩いた。

「……先生がお前を直接叩かないのは、たまたま先生がそう言うご気分だからだ」

その時は男がいて、腕を組みながら董子を見下ろし、そう言った。その日は一日中、董子が何か言おうとすれば目の前の床を叩かれ、許可なく立ち上がろうとすれば床を叩かれていた。目の前の床を叩かれては身をすくめているうちに、董子は学んだ。いや、植え付けられた。逆らっても無駄だと。狂っているのが彼らだとしても、迎合するしかない。

申し訳程度に敷かれた段ボールに、董子はうずくまる。ご丁寧に、人權を停止された次の朝には用意されていた。少なくとも足の痛みは和らげられる。

「きりーつ……」

授業が始まる。かつかつと板書のチョークが黒板にぶつかる音を聞きながら、董子はかつて自分が座っていた席に目を凝らす。教科書が詰まったままの席は主もなく、教室の中でぼつねんと所在なげにたたずんでいる。あ

そこに座つて夢を見ていた日々を思い返すと、ぎりぎり胸が痛む。いっそ、誰かが窓から投げ捨ててくれたら、あるいは、花の一つも手向けておいてくれたら、まだ救いがあつただろうか。

今の童子は、眠ることも、授業を聞くことも許されず、ただ座っている。何もしていないことがこんなにも苦痛だとは、想像もしなかつた。犯されたり、体をもてあそばれたり、衆目の中で屈辱にさらされるのとは異なる苦痛。時間が過ぎるのが、ただただ遅い。最強で、最良だつたはずの日々の一時間が、ただただ無為に過ぎていく。

ようやくのことで、一時間が過ぎる。教科担任が教室を出ると、クラスが喧嘩を取り戻す。たわいもない駄弁りに興じる生徒たちの何人かが、ちらちらと童子のほうに横目で視線を送る。男子生徒の多くは、半裸でうずくまる童子の肢体に、年相応に色気づいた視線をあげすけによこしてくる。だが、直接手を出してくるものはほとんどいない。童子にとつてむしろ不快なのは、時折女子生徒の中に混じる、軽侮を含んだ冷たい視線だつた。あの男を思い出させる、深海魚めいた暗い光をかつてのクラスメイトの目に見出しながら、童子は自問する。もしこうしてここにうずくまっているのがクラスの女子の他のだけかで、自分がそれを眺める立場にいたら、自分は正しい振る舞いをしただろうか、と。

答えが出ない問題だつたが、考えていけば時間はつぶせる。思考までには誰も介入してこない。それが、今や童

子に残された最後の娯楽だった。

「はい、授業はじめますよー」

四時間目。教卓から響く能天気な声に、董子は思考の淵から我に返る。教壇には白衣を身にまとった女性教諭が立ち、董子を見下ろしている。董子の表情が露骨に曇る。金色の髪の上で、シニヨンキャップを大きくしたような、奇妙な形の帽子が揺れている。見慣れない女。董子が誰とも知らぬ男の所有物に墮とされたその日まで、校内にこんな教師がいるのを見た記憶がなかった。

「はい、男子の皆さん！ 精液は持つてきましたかー」

さらさらと小気味よいチョーク運びで黒板に男性器の解剖図を書きながら、女教諭がクラスに声をかける。調子づいた男子生徒の一人がはい、忘れました、と底抜けに明るい声で答えると、クラスの中に忍び笑いがさざめく。

「えーとですね、皆さん笑ってますけれども、マスターベーション、いわゆるオナニーですね、これは結構健康にかかわってくる問題でして、特に男子の場合ね。ここ、前立腺っていうんですけど、作られた精液をそのままにし

ておくと、炎症とかガンとか、そういうリスクにつながるものがわかっているわけです。もしかしたら皆さんもエッチな漫画とかでぶるぶるの濃い精液みたいな表現を読んだり見たりするかもしれませんが、これは実は古くて劣化してるんですね、どちらかというとさらっとしてる方が新鮮で精子も元気なんです。じゃあ、えーと、精液持ってこなかった人もう一回手を挙げてください」

ほつり、ほつり、クラスに二十人ほどの男子生徒のうちの、およそ半数が手を挙げる。

「えー、じゃあ忘れた人は前のほうに集まってください。持ってきた人は教卓のところに提出してくださいね」
狂っているのは私のほうだろうか。行儀よく列を作って、教卓にプラスチックの容器を置いていく男子生徒たちを横目に見上げながら、童子は自らの肩を抱く。席に戻っていく男子生徒たちが時折投げかける、あからさまな性的好奇の視線が、頼りなくさらけ出された少女の肢体に突き刺さる。

「はい、ではお昼休みには少し早いですが……」

女教師が、がさごそと足元のポリ袋を探る。取り出したのは、コンビ二弁当だった。温められてはいないが、濃味のタレが掛かった肉の香りが童子の鼻先まで漂い、若く健康な胃をきゅうっと締め付ける。

「さあ、どうぞ」

教卓の脇から見上げる物欲しげな視線を認めると、女教師は童子の目の前にフタを開けた弁当を置き……生徒から集めた容器の中身を振りまいた。

「……ああ、皆さん若くて健康な精液ですなあ」

一つ、また一つと容器のふたを開けては、弁当の上に白く濁った粘液を振りかける。米飯、甘辛いタレの絡んだ鶏肉、ポテトサラダ、添え物の柴漬けにまで、一滴一滴まんべんなく。

「さあ」女教師は童子の前に屈み込んだまま、にこやかに微笑んだ。「どうぞ」

食べろ、とは言われていない。目の前に置かれた、男子生徒たちの精液で汚れた弁当と、女教師の顔を交互に眺めながら、童子は逡巡する。まともな状況であれば、口をつけるはずがない。しかし、鼻をつく栗花の青臭さに紛れてなお、甘辛く焼けた肉の匂いが、童子の意識から離れなかった。これを拒絶すれば、待っているのは男の家であたえられるふやけた鳥の餌だけだ。

(いただきます)

心の中で手を合わせながら、童子は鼻面を突っ込むように、弁当の容器に口をつけた。口の中にいがらっぽくまとわりつく夾雑物を気にしなければ、口の中に広がる肉の滋味は、涙が出そうなくらいにおいしかった。そう

だ。そんなものは、ただの誰かの体液だ。食べたところで腹を壊すわけでも妊娠するわけでもない。

……本当に食べてるよ。……マジ？ ……AVで見たことあるべ。……信じらんない、うわー……。

嘲笑とも軽侮ともつかない、もとクラスメイトたちのささやきが遠くに聞こえる。違う。私が食欲に負けたんじゃない。童子は思考を遮断し、自分に言い聞かせながら咀嚼に専念する。同じ状況になれば、誰だってそうする。狂っているのは、状況のほうだ。

「さあ、皆さん」

無心に弁当を貪る童子の周りに、女教師は提出物を忘れた生徒たちを立たせる。あられもなく胸や脚を垣間見せながら、精液まみれの餌に這いつくばって舌を伸ばすかつてのクラスメイトの姿に、一様にペニスを怒張させながら、男子生徒たちは握ったその先端をうづくまる童子に向ける。

色、大きさ、包皮からの亀頭の露出具合。様々なペニスが、集中線を描くように、童子を向く。無関心に弁当をついばむその眼前に向けて、一人、また一人と、しごきたてたペニスから青白く濁った粘液をほとぼしらせる。その背後で女教師が元気ですねえ、と朗らかに笑う。

男子生徒の一人がはねかけた精液が、目当てを外れて童子の顔にかかり、童子は視線を上げた。眼鏡についた

精液に視界がゆがみ、その向こうの顔がよく見えない。その誰かが、呟くようにごめんね宇佐見さん、と言ったような気がした。たぶん気のせいだろう。董子は考えるのをやめ、すするように容器の底に残った米粒の最後の一口を呑み込んだ。

夜。床にうずくまって、男の用意したエサ皿に舌を這わせながら、董子は一日を振り返る。結局、喉に絡みつような精液のいがらっぽい後味は、男に連れられて学校を出るまで消えなかった。帰り路の駅のトイレで、また誰とも知らぬ人間の一物を啜えさせられるまで、というべきか。

びたびたと犬のように舌を出しながら、董子はエサ皿の中身をすすする。夜は、水とシリアルの上に、プロテインか何かのサプリメントと粉末の青汁が浮かんでいる。栄養バランスはとれているのだろうが、緑と黄色の粉が毒々しくだまになって浮かんでいる様は、食欲をそそる眺めではなかった。

ダイニングテーブルのほうから、何か美味しそうなのもの匂いが漂い、董子は視線を上げる。鼻腔に覚えのある、スパイスと香ばしい食用油の香り。フライドチキンだろうか。董子の視線からは見えない。男はちょうど食事を終え、席を立つところだった。

「終わりだ」

一人がってに食事を終えると、男は董子の前の九割がた空になったエサ皿を蹴飛ばし、風呂場の方へと鎖と引いた。この家の風呂場には石鹸がない。シャンプーもない。部屋の主が使わないからだ。男が服を脱ぎ、ややたるんだ腹の下からさらけ出した一物を董子のほうに突き出す。無言のまま、董子は舌を伸ばす。半ば柔らかいままの男のペニスの微妙な凹凸に、びたびたと唾液を絡ませながら、董子の舌が這う。口の中から唾液を絞り出すのは、男に奉仕するためではない。臭いが耐えやすくなるからだ。下着の中にこもった汗と尿のすえた臭い、何よりも、男の陰囊からにじみ出るようなつんと来る体臭が、少女の鼻を刺す。足元にうずくまり、見上げるようにしながら陰囊の裏側までを清め終わると、男が背中を向ける。

「……う……」

董子は一瞬逡巡し、そしてためらいがちに、男の尻の谷間に顔を埋める。なるべく臭いが薄れるように、出来るだけ唾液を絞り出しながら尾てい骨に沿って下へと口づける。喉の奥から鼻腔へと、えぐい苦みと、養鶏場のケージに鼻を突っ込んだような不快な汚臭が広がる。舌先に絡まる毛を口の端からよけながら、董子は何も考えないように、ただ無心に目の前にあるものをねぶる。

一通り局部を口で清めさせると、童子を床に控えさせたまま男は体を流すことなく湯船に浸かる。そのまま童子がいることを忘れたかのように風呂から出ると、男は雑に体を拭き、部屋の明かりを消して寝室に入っていた。そのまましばらく、童子は暗い浴室の床にうずくまったまま、待つ。

男が寝静まったと判断するに十分なだけ待つと、童子は音を立てないように注意を払いながら、手探りで湯船に入った。そのまま、残り湯で体にこびりついた汚れを落とす。暗かったが、湯に浮いているであろう男の垢や毛を見なくて済むのはありがたかった。シャワーを使えるものなら使いたかったが、男を起こすリスクは冒せない。

顔と髪、そして口の中だけは、蛇口から音を立てないように細く出した湯で洗う。男に舐めさせられた尻の穴の汚臭を思い返すと喉の奥の方に嫌な唾がわいてくるが、深く息を吐いて吐き気を押さえる。吐けば腹が減る。

朝まで食べるものはない。石鹸がなくて幸いだった。もしここに石鹸かボディソープがあれば、舌先から尻の穴まで裏返すように洗いたいという欲求に抗えなかったかもしれない。名前も知らない男のペニス。尻の穴。精液まみれの弁当。消化管の入り口と出口からねじ込まれたものが、自分を内側から汚していく。洗えるものなら全部洗ってしまいたい。

音を立てないように、男が使って放置していったバスタオルで体を拭く。髪はまともに乾かせていないのでい

つもごわついているが、こびりついた汚れはなんとか落ちてゐる。男も、董子が勝手に体を洗っていることには勘付いているのかもしれない。リビングのソファの横、朝起きたのと同じ定位置にもどると、自ら鎖を壁のフックに掛ける。

董子がうずくまっているとところからは、短い廊下越しに玄関のドアが見える。外の光が覗き穴から差し込んで、ほの青く光っていた。

初めてこの家に連れてこられた夜。男が寝静まるのを見計らつて、董子は部屋を逃げ出した。裸に男から拝借した上着をひっかけたあらゆる姿のまま、董子が最寄りの交番に駆け込むと、事情を聞いた警官は電話を一本かけた。そして男が迎えに来た。

首輪を鎖でつながれた半裸の少女の前に、逃げ出したベッドでも扱つかのようによに礼儀正しく会話する男と警官。その超現実的な光景を思い出しただけで、胃が沈み込むように重くなる。連れ帰る途上、鎖を引いて歩きながら、男は無言だった。脅すでも怒鳴るでも殴るでもなく、部屋に戻ると董子の鎖をつないで、また寝た。

真つ暗な部屋の中から冷たいドアを見つめながら、少女は無意識のうちに口をゆがめ、自嘲する。何のことはない。学校も、人々も、警察までもが狂っているこの世界で、まだ正気を保とうとしている私じしんが一番可笑しいのだ。この狂気に抵抗するにも、逃げ出すにも、機を窺う必要がある。その時までには、耐えるしかない。出されたものは食べ、風呂の残り湯で体を洗い、体力と正気を維持する。朝からもてあそばれた尻の穴がじくじくとずいたが、何とか眠れそう。最初の夜は、背中を裂かれるような痛みで眠れなかった。暗い部屋の中でうすぼんやりと光る時計の日付に目をやる。この生活が始まってちょうど一週間だった。これが私の一週間。散々だ。夢が見たい。眠りたい。

董子は眼鏡をはずし、毛布の中でうすくまっけて目を閉じた。